

クリスマス・ドラマスペシャル

石井忠雄作 「もう一つのクリスマス物語 ベツレヘムの幼子」

<第1部>

第1場 兵營の庭

(効果音) 騎兵隊の行進、停止。

百人隊長 整列！ お前たちは、誇り高きローマ軍人だ。今日一日の務めをしっかりと遂行するように。自分の持ち場をみだりに離れたり、他人の力を当てにせず、自らの力で責任を全うするように。いいな。よし、それでは解散。そうだ、テトス、お前はちょっと残れ。

テトス 何でしょうか、隊長殿？

百人隊長 うん。近ごろ、このベツレヘムの町で、ユダヤ人の中で何やら不穏な動きがあるらしい。今日からお前は城門の警備だ。それとなく気をつけてくれ。お前の働きは、千人隊長のブルカヌス様の耳に入れておいた。今度手柄を立てれば、出世間違いない。しっかり頼んだぞ。

テトス わたしはローマ軍人です。どのようなときにも、冷静沈着に行動いたします。お任せください。

ナレーション ——と胸を張って答えた男は、ローマ軍のベツレヘム守備隊の兵士、テトス。時は今から約 2000 年前。ローマが世界を征服し、支配していた時代。ユダヤは、ローマの傀儡<sup>かいらい</sup>政権であるヘロデ大王によって治められています。ヘロデ大王は、自分の絶対的な支配を確立するために、自分の妻や母、そして子供たちまでも次々に殺害していきました。そのあまりにもローマ寄りの政治は、多くのユダヤ人の反感を買い、あちらこちらで暴動が起こっていたのです。

(効果音) (人々の叫び声)

ナレーション そんなある日、ここはベツレヘムの城門。兵士テトスは、道を行く人々をそれとなく観察していました。その彼のすぐ前で、ユダヤ人の夫婦らしい男女が仲むつまじそうに話しています。

第2場 ベツレヘムの城門

テトス おいこら、そこで何をヒソヒソ話しておるのだ？

ヨセフ はい、あの野原に咲いているユリの花があまりにも美しいので、そのことを話しておりました。

テトス 何？ 花が美しいだと？ 女々しいことに心を動かすな。男はもっと激しいことに心を動かすものだ。砂漠の焼け付くような太陽。その中を進む一糸乱れぬ行軍。飛び来る火矢。戦場の雄たけび…。どうだ、考えただけでも、身が震えるほどの感激を覚えるではないか。貴様らユダヤ人は、このローマが守ってや

ってるんだぞ。

マリヤ このユリの花は、神様によってつくられたもの。神様のつくられたものに感動しないような人は、愚かな人と言われても仕方ありません。

テトス 何!? 愚か者は貴様らだ。貴様らユダヤ人は、何かと言えば“神様、神様”で、自分からは何もしようとしな。さあ、ここは城門だ。こんなところでグズグズしていると容赦はせんぞ。あっちへ行け。さっさと行くんだ!

ナレーション その夫婦は、追い立てられるように城の外の野原のほうへ歩いていきました。その前を、彼らの子供でしようか、まだ2、3歳ぐらいの小さな男の子が、とことこ走っていきます。

テトス(モノローグ) ん? あの女、子供に何をやらせてるんだ? ユリの花から何かを摘んでは、抱き上げて木のほうへ行く。一体何を?…そうか、ユリの花の中の弱っているハチを1匹ずつ巣まで運んでやってるんだ。あんなことして一体何になると言うんだ? ユダヤの国のやつらは、口を開くと「神だ、平和だ」と口にしやがる。そんなものは、自分たちの力で、武力によって勝ち取るものだ。

それにしても、あの子連れ夫婦は目障りだな。ほかの者に哀れみをかけるなど、見ているだけで腹が立つ。

テトス (遠くに)おーい、そこの二人、ガキを連れて早くどっかへ行け! おれの前からうせろ。さもないとこの槍でクシ刺したぞ!

ナレーション それから数日して――

千人隊長 テトス、変わりはないか? お前の働きは、百人隊長から詳しく聞いておる。ところで、今日は少し顔色が悪いぞ。暑さのせいかな、それともどこか体でも悪いのではないかな? もしそうなら、今日一日務めを休め。

テトス はい、ブルカヌス様。大丈夫です。なんの、これしきのこと。自分はローマの軍人です。

千人隊長 そうか。よし、では勤務に就きたまえ。くれぐれも不穏な動きには注意するように。

ナレーション その日も快晴で、城門の前の野原では、またしてもあの夫婦と小さい子供がユリの花と戯れていました。

テトス(モノローグ) またあいつらか。何度追い払っても懲りないやつらだ。それにしても、あのチビめ。どこかほかの赤ん坊と違うな。あどけない顔だが、少しも物おじしない態度、花や虫をいたわる心。…ユダヤ人たちは、今に平和の王が来るなどと言っているが、あんな子供がそうなのかもしれないな。…いや、そんなことはない。平和は我らローマ人の手でもたらされなければならぬのだ。

それにしても、今日はヤケに暑いな。ノドが渴いてくっつきそうだ。でも、おれは負けないぞ。あのシリヤ砂漠での戦いでだって、暑さに負けず、大手柄を立てたんだ。何、負けるものか。おれはおれの力で…。

ナレーション テトスの重いよろいによりに照り付ける太陽の熱は、彼の体から水分を奪い、ついに彼は倒れてしまったのです。しかし彼は薄れゆく意識の中で――

テトス(モノローグ) おれは負けないぞ。おれは…。

ナレーション と叫んでいました。そのうちに彼は夢の中で、冷たい泉の水を口に含んだような気がしました。その水は、口の中でミツのように甘く広がっていきます。彼は、うっすらと目を開きました。すると、あの幼子が彼の上にかがみ込み、小さい手ですくってきた水を、彼の口に注ぎ込んでいるのです。子供の顔は、優しさといたわりに満ちていました。しかしテトスは、それに気がつくや、邪険に子供の手を振り払いました。

テトス えい、何をするんだ。おれは他人の力など借りんぞ。赤ん坊に毛の生えたガキのくせに、人に情けなどかけやがって。

ナレーション そう言って起き上がると、彼はそばに落ちていた槍を振り回しました。幼子は、両親とともにいつの間にか遠くに去り、その後ろ姿は、ユリの花の間に次第に小さく消えました。

### 第3場 兵營

ナレーション それから数日後、テトスは百人隊長に呼ばれ、一つの命令を受けました。

百人隊長 テトス、お前に折り入って話がある。というのは、先ごろ、ヘロデのところ、当方の博士たちが訪ねてきて、ユダヤに王が生まれたというのだ。ヘロデは、ユダヤ人の王の居場所を知らせようと、博士らに頼んでおいたのだが、彼らは黙って帰ってしまったのだ。何でも、ユダヤ人の長老たちの話によると、その王が住んでいる町は、このベツレヘムで、今年で1歳か2歳になっているというのだ。

テトス それで、その王様を捕らえるようにというのですか？

百人隊長 どこにいるか分かっているか。だがそれは皆目見当がつかん。そこでヘロデは、ベツレヘムにいる2歳以下の男の子供を皆殺しにしろと言っているのだ。

テトス 皆殺しですって？

百人隊長 そうだ。ヘロデという男は、残忍な男だから、そんなことなんとも思わないだろう。

テトス でも、相手は赤ん坊ですよ。

百人隊長 そのとおりだ。しかし、最近ユダヤ人は、ヘロデだけでなく、我々ローマに対しても反抗している。その証拠に、先月も兵營が襲われ、多くの死傷者を出した。ここでもし、ユダヤに王が生まれたなどというわさが広まってみる。それこそ手が付けられなくなるぞ。ヘロデの命令だが聞かずにまい。

テトス 自分も、ユダヤの預言に、「この世に救い主、メシヤが生まれる」と言われていることは聞いています。しかし、まさかそんな預言は実現しないでしょう。

百人隊長           だが、東方からの博士たちが、メシヤが生まれたと言ってはるばる訪ねてきたのだ。たとえウソでも、手を打っておくに越したことはない。テトス、お前なんか気が進まないようだな。

テトス               いいえ。隊長の命令とあれば、立派にこの仕事をやってみせます。

百人隊長           そうか。それでこそローマ軍人だ。任務をやり遂げたら、お前をきつと副隊長にしてやる。

ナレーション       しかし、テトスの心の中には何か割り切れないものがありました。

テトス(モノローグ) あの子供も、ここで遊んでいるところを見ると、ベツレヘムに住んでいるのだろうか。おれは、子供になんか何の関心もないが、あの子のことは妙に気にかかる。…まあいいや。おれはローマ軍人だ。来月辺りは、副隊長になって多くの部下を持つんだ。ようし、準備にかかろう。

ナレーション       そう言うと彼は、剣や槍を入念に磨き始めました。兵舎のあちこちで、兵士たちの研ぐ武器のガチャガチャ触れ合う不気味な音が、その夜、遅くまで聞こえました。兵舎の窓からは、不思議に赤い大きな星が光って見えます。ベツレヘムの夜は、子供たちに、そしてあの幼子に迫りくる恐るべき運命など知らぬげに、静かに更けていきました。――

## <後編>ベツレヘムの幼子

### 第1場 ヘロデの宮殿

ナレーション       ここは、ベツレヘムにあるヘロデ王の宮殿。所狭しと豪華な飾り付けがされ、床にはバラの花びらがちりばめられています。今日は、ヘロデの末の王子の誕生祝いが、この宮殿で催されるのです。そして、この祝宴には、ベツレヘムの2歳以下の子供が母親とともに招待されていました。

(効果音)           (宮殿内のガヤ)

母親1               まあ、見てください、天井から下がっているブドウの枝を。おいしそうな実をいっぱい付けて。

母親2               ほんと。こちらの通路には、ザクロとオレンジですわ。まるで庭園みたいね。

母親1               こんなすばらしい宮殿にわたしたちを招待するなんて、ヘロデもどういう風の吹き回しでしょうか。

母親2               きつと人気取りじゃない？

母親1               それにしても、子供同伴でなければなんて、どういうことでしょう。しかも2歳までの赤ちゃんだけなんて。

母親2               親なんて、子供に弱いんですよ。子供に良くしてもらえば、自分にしてもらった以上にうれしいものですもの。そこがヘロデの付け目ね。

母親1               あら、向こうの部屋に御馳走が用意されていますよ。行ってみましょう。

(効果音)           (にぎやかな音楽。人々のガヤ)

ナレーション こうしてその夜、ベツレヘムの中の2歳以下の子供と母親が、ヘロデの宮庭に集められ、にぎやかな祝宴が始まりました。豪華な料理のもてなしの中で、動物の曲芸があり、手品があり、集まった一同は夢でも見ているような気がしていました。

百人隊長 テトス、お前は出入り口を固めろ。もし外へ逃げ出す者がいれば、直ちに捕らえ、男の赤ん坊がいたら殺すのだ。もし邪魔をする者がいたら、構わぬ、そいつも切っ飛ばしな。よいな？ わたしの合図で兵隊が宴会場に突入し、子供を殺す。必ず逃げ出すやつがいるはずだ。子供は絶対に逃すな。よいな？

テトス はい、分かりました。アリの子一匹だってはい出させやしません。

テトス(モノローグ) だが、あの子は来ているのかな？ 人に水を飲ませたりしてお節介なやつだ。ここにいたら殺されてしまうぞ。だが、なぜこんなに気になるのだろう。…いやいや、どんなかわいそうでも、見逃しにして、あとで禍根は残すまい。

(効果音) (物の倒れる音。母親の叫び声)

ナレーション 突然広間のほうで、激しい物音がしたかと思うと、あちこちで叫び声や悲鳴が聞こえました。兵士の一団が、広間に突入し、手当たり次第に幼子を殺し始めたのです。と、その時です。

母親1 助けてください。助けてください。わたしたちを逃がしてください。わたしたちは何も悪いことをしていないのです。このとおりです。

テトス ええい、そうやすやすとここを抜け出せると思っているのか？ 王の命令だ。さあ、赤ん坊をこっちへよこせ！

母親1 まあ、何てひどいことを！

テトス ぐずぐずすると、お前も一緒だぞ。えい！

母親1 キャー！

テトス おとなしく子供をよこせば、お前まで殺さなくてよかったのだ。さあ、子供を1人やったぞ。

ナレーション 地獄のような数十分が過ぎました。その夜、何十人、いえ、何百人の幼い命が奪われたことでしょう。辺りはシーンとして、もう広場のほうからの叫び声も聞こえません。——と、その時です。

テトス おい、ちょっと待て。

マリヤ なんでしょうか。

テトス お前が抱えているものはなんだ？

マリヤ はい…。

テトス 「はい」では分からんぞ。

マリヤ ……(突然駆け出す)

テトス あ、待て！

ナレーション その時でした。テトスは目に激しい痛みを覚え、剣を床に落としてしまいました。

彼が慌てて目を押さえると、何か手に触るものがありました。

テトス

なんだ、これは？ ハ、ハチか。邪魔をしゃがって。あ、待て！

ナレーション

彼が気がついた時には、子供を抱えた母親は、もう宮殿の階段を降り切り、道路に出たところでした。

百人隊長

テトス、どうした？ 逃げ出した女はどこへ行った？

テトス

すみません。ハチのやつが邪魔をして…。

百人隊長

ハチだと？ 何を寝ぼけたことを言っているんだ。残ったのはあの女の子だけだ。あのガキが一番怪しいんだ。それともお前、逃がしてやったんじゃないだろうな？

テトス

そんな、とんでもない。

百人隊長

もしそうなら、ただじゃ済まないぞ。いいか、捜すんだ。明朝早く、城門を開く。出入りするやつを片っ端から調べるんだ。よいな？ 今度失敗したら命はないものと思え。

ナレーション

さあ大変なことになりました。テトスは、たかがハチ1匹のために後れを取ったことが悔やまれてなりません。それとともに、あの幼子が、自分に反抗したような気がして、悔しさとともに激しい憎しみがわいてきたのです。

## 第2場 城門の前

ナレーション

次の日、テトスは、まだ暗いうちから城門の前に立ちました。なんとしてもあの親子を捕まえなければ気が収まりません。いや、そうしなければ、自分の命が危ないのです。もう出世どころではありません。と、夜が明けきらぬうちに、1組の夫婦がベツレヘムから出てきました。1人はクワを肩に、1人は大きな荷物を衣に包むように抱えていました。

テトス

待て。いつかの夫婦だな？ どこへ行く？

ヨセフ

わしらは、これから野良に出るんですが。

テトス

女が着物の下に隠しているものはなんだ？

ヨセフ

今日の昼飯のパンとブドウ酒でさ。

テトス

ふーん。怪しいな。ちょっと見せてくれんか。

ヨセフ

妻に着物を脱げと言うんですかい？

テトス

そうは言わん。ちょっと前のほうだけ明けて、少し中身を見せてもらえばいい。それとも、見せられないものでも入っているのかね？

マリヤ

結構です。どうぞご覧ください。

ナレーション

その2人は、だれあろうイエスの母マリヤと、夫のヨセフでした。テトスがのぞき込んだマリヤの服の中には、美しいユリの花がいっぱいでした。手を入れて捜しても、どこのも幼子の姿は見えません。

テトス

おかしいなあ。確かにチビがいる気配がするのだが。しかし、見つからないなら、ここに止めておくこともできんな。よし、通れ。

ナレーション テトスは、2人が見えなくなるまで見送りました。しかし彼は、いまだに割り切れない気持ちでした。あのユリの花に、あの子供が飲ませてくれた水の感触を感じたのです。

テトス(モノローグ) 確かに子供はいた。だが、おれには見えなかった。なぜだ？

ナレーション その時です。

百人隊長 おい、あいつらを捕まえろ。ゆうべ、あいつらの家に博士が訪ねてきたんだ。何をしている。早く追え！

ナレーション テトスは、反射的に近くにいた馬に乗ると、2人の跡を追いました。

(効果音) (激しい風の吹く音)

ナレーション それから数日後のこと。テトスは、エジプトに向かう途中の荒野の中の洞窟<sup>どうくつ</sup>で、とうとう2人を見つけました。その時2人は、眠り込んでいましたが、その横にあの幼子が、目を開けてテトスを見つめていました。

テトス おれは、お前を捜したぞ。ここで見つかったのは、お前の不運とあきらめろ。お前の首には、おれの命と出世がかかっているんだ。

ナレーション テトスは、そういうと剣を抜いて子供の前に突き出しました。と、その時でした。暗やみの中で何物かが彼の周りを飛び回り始めたのです。

テトス な、なんだ、これは？

ナレーション テトスは、この邪魔物を避けて剣を振り回しましたが、その時、顔や体のあちこちに鋭い痛みを感じました。

テトス あ、痛い！ ああ、ううう…。

ナレーション 彼の目に、数日前、倒れた自分に水を飲ませてくれたあの幼子の顔が映ったのです。

テトス あ、お前は…。

ナレーション テトスは気がついたのです。ハチが、この幼子の命を守るために、飛び回っていることを。そして自分は、命を助けてくれた子の幼子を、今まさに殺そうとしていたのだということ。

テトス おれは何という恥知らずな人間なのだろう。何て罪深い人間なのだろう。自分の命のため、出世のために、恩人の命さえ奪おうとしている。それなのに、この子は、何という優しい目をしておれを見ているのだ。赦<sup>ゆる</sup>してくれ。どうか、おれを赦してくれ！

ナレーション テトスは、剣を投げ出すと、この幼子の前にひれ伏したのです。あの博士たちが礼拝したように。

(音楽) (十字架の静かな音楽)

ナレーション それから30年の歳月が流れました。今、老いたテトスは、カルバリの丘に立っています。そこには、かつて幼子だったイエス・キリストが、十字架にかかっておりました。

テトス

まことにこの方は、神の子だ。イエス様、わたしをお覚えていますか？ 30年前に、何の罪もないあなたの命をねらった男です。今、あなたは、同じように何の罪もないのに、こうして十字架につけられておられる。人間とは愚かなものです。だれも、自分が罪のないあなたを十字架につけて殺したことに気がついていない。かつてのわたしもそうでした。しかし、今、わたしは知っています。あなたの十字架は、わたしの罪を赦すためであることを。あの時からわたしは、心の中でひそかにあなたに従ってまいりましたが、この30年間、あなたは、一度だってわたしを裏切ったことはありません。それどころか、いつも慈しみ深い目でわたしを見守ってくださいました。今こそ、わたしは分かりました。この世の平和は、人間の力で、剣の力で実現するものではない。あなたが身をもって教えてくださった“愛”の力によるのだということが――。

ナレーション

テトスの年老いた顔に、涙が滲んでいました。彼の目には、真っ暗になったエルサレムの空に、30年前のあの夜、ベツレヘムで見た大きな星が、ひときわ輝いているように思われました。

<完>